

和刻漢籍鼈頭本について

—その特質と沿革—

高山 節也

はじめに

以前から和刻本の漢籍を調査した折々に、末尾の圖にあるような印刷面の文献を筆者はしばしば見てきたのであるが、この版式の文献は中國の古典籍中には見あたらないようである。このことは復旦大學の吳格教授の談話にも觸れておられるが、これが和刻本独自の形式ということであれば、そこには和刻本としてのなんらかの意味づけや、出版事情があるうかと考え、それをこれまでに得られた資料から抽出、あるいは推理してみたいと考えた次第である。

となれば、本來であれば和刻本漢籍の全てを調査して、あらゆる實例を網羅したうえでもの言わなければ不正確であるとの譏りを免れないが、しかしこの時期、この期間で、佛典と醫學書を除いても大まかに三千五百點もあろうかという⁽¹⁾、和刻本漢籍の悉皆調査は土台むりなはなしでもあり、筆者や筆者の仲間がこれまで調査してカード化したものが千五百點ほどある⁽²⁾ので、その範圍に限って調査のうえ、報告したいと思う。したがって筆者の未確認の資料や情報をお持ちのかたは、どうぞ後々ご教示頂きたくお願い申し上げます。

一 鼈頭本という名稱について

まず確認しておくべきことは、圖にあるような形態のものを、これまで筆者は漫然と「鼈頭本」と呼んできたのであるが、果たしてそれでよいのかであろう。以下それを検討するにあたって、呼び名を確定するまでは、一應便宜上この形式のものを「當該形態」と呼ぶこととしたい。

さて、「鼈頭」という言葉は本来中國では大龜の頭を指したもので、さらに物事のトップ、たとえば科擧の主席及第者などの意味も派生するが、書籍の上層の註釋などを鼈頭と呼んでいる例が中國にあるのかについては、管見のおよぶかぎりにおいては未見である。國書系の書誌學用語を調べてみると、「鼈頭」は「首書」や「頭書」と殆ど同じ事で、本文上部の註記等をいうのだということ、これは『日本古典籍書誌學辭典』も中野三敏『江戸の版本』なども同様の説であった。ただこれについては、筆者は後で述べるような理由で一概に賛同しかねる部分もあり、またたとえば『日本古典籍書誌學辭典』には、「首書」は江戸の延寶・貞享ごろにはやり始めた形式だとあるが、和刻本漢籍の分野では少なくとも正保からある。しかも「首書」という言葉は調査のかぎりでは、おおむね「當該形態」の文獻を中心として使われている⁽³⁾。ということは『日本古典籍書誌學辭典』の各稱呼についての記述自體にも、問題點がそれなりにありそうだといえよう。

これについては、まず「當該形態」の文獻がどう呼ばれてきたかを年代順に配列して、各稱呼の年代的狀況を檢討することが必要であろう。表1「鼈頭本特殊稱呼別分類年表」を参照されたい。この表は、「當該形態」の書物につけられた特殊な稱呼を、稱呼別に分類して年代上に配列したものである。たとえば正保五年跋刊本『老子虜齋口義』には「道春點／首書老子經」という題簽が貼られている。道春點というのは林羅山が點をつけたことをいうが、ここでいう「首書」は、恐らく

この書物の形態をのべた言葉であるにちがいない。とすれば「當該形態」について「首書」という言い方が正保五年にはあったという証據となる譯である。もっとも題簽は一旦出版された後、後刷りに際して張り替えるなどの可能性もあるが、初刊本に張られた題簽は、初刊の時のものである可能性が高く、むしろ初刊か否かの判断こそが大切なのである。これについては筆者自身による比較や鑑定のみならず、和刻本目録やその他信頼に價する各種の文庫目録などの判断をも参考として各刊年等を認定しているので、おおむね妥當な判断であろうと考える。

さてこの年表によれば、「首書」「頭書」「龍頭」「冠註」「標注」といった呼び名が「當該形態」の書物に付けられていることが明らかであるが、そこには年代的な推移があるようである。最も古くからある呼び名は「首書」で、江戸初期から延寶年間ぐらいまでに集中して出てくる。それ以降の事例は元祿初期までの出版物の復刻本であるから、「首書」という呼び名は元祿初期頃までで途絶えている可能性がある。ただ、あくまで私の調査の範囲の話で、すでに觸れたが「首書」という呼び名は、二段本としては萬治四年の『新刊錦繡段鈔』の版心に使われている例が一例のみあって、それ以外は、のどまで注が及んだ「當該形態」の書物のみにつけられているのである。

それに對して、「頭書」や「標注」は二段本にも多々用例があり、かならずしも「當該形態」にかぎった呼び名ではない。特に「標注」はほとんどが二段本の用例で、あまり注目する必要はないように思われる。

「冠註」については元祿年間の佛典にみえるが、その後も佛典を中心として外典も含めていささか用例がある。ただ書店の書目記載の場合は實見していないので、すべてが「當該形態」の書物であるか否かは不明である。時期的にはちょうど「首書」が途絶える頃から現れて、比較的近年の「當該形態」の出版にも使われており、しかも題簽のみならず、凡例や序首・巻首の人名の編著事項などに現れるので、呼び名としてそれなりに定着したものであった可能性がある。ただ用例の實數はさほど多くはない。

では「龍頭」はどうであろうか。まずこれは江戸初期からおおむね元祿ごろまでに集中して現れ、しかもそれはすべて

が「當該形態」の書物であった。それ以後は「當該形態」の新刊書にこの名が付けられる例は激減する。もともと「當該形態」の新刊書自体が激減するのであるが、そのことについては後ほど觸れることとしたい。なお明治に入ると、今度は急激に「鼈頭」の呼び名をもつ書物が増加するが、それは調査の限りではすべてが二段本・三段本である。

年表には「鼈頭」の呼び名をもつ出版のもつとも早い例として、江戸初期『四書大全』をあげておいたが、これは正確な年代の不明なもので、一應刊語に「鼈頭評註 妙壽院藤原斂夫先生輯 刪補訓點石齋鵜信之」とあり、鵜飼石齋の没年寛文四年以前ということ、この位置に配列した。ちなみに藤原惺窩の没年は元和五年である。石齋は惺窩の弟子であるので、その遺稿を手に入れてこれを版に起こしたということは十分考えられることである。この書においては、題簽と刊語に「鼈頭評註」という言葉があり、特に刊語にみえることは鼈頭という呼び名がその書物の出版段階で定着したものであることを示しているが、ただ本書の出版時期については下限が設定可能なだけで、上限はなんともいえず、したがって鼈頭の呼び名の初期設定としてはいささか曖昧であると謂わざるを得ない。

確實なところは、寛文五年武村三郎兵衛刊の『魁本大字諸儒箋解古文眞寶前集』であろう。これには「鼈頭評註」とする題簽の外に、宇都宮遯庵の跋文中にこの呼び名が出ており、

本朝之學者、專好後集講說之。此故或鼈頭、或諺解、有便于後集者不爲不多。

「本朝の學者専ら後集を好みて之を講説す。この故に或いは鼈頭、或いは諺解ありて、後集に便あるもの多からずと爲さず」（以下引用については無點のものが多く、適宜筆者が補う）

とあり、「諺解」とならんで「鼈頭」の語が使われている。このことは「鼈頭」が單に書物のある部分を示すのみならず、そこに付された注解を同時に表していることを意味している。さらにはこの書物以前に、『古文眞寶後集』には「當該形態」の文献があり、それを宇都宮が鼈頭注であると認識していたことをも示しているのである。具體的にはこれは慶安元年刊『魁本大字諸儒箋解古文眞寶後集』、あるいは寛文二年田原仁左衛門刊で松永昌易注の『魁本大字諸儒箋解古文眞寶後

集』などであろうと思われるが、これら自體には「首書」とも「鼈頭」とも記されていない。松永には此とは別に、寛文四年野田庄右衛門刊本『五經集註』の「當該形態」注があつて、題簽に「首書」とあるが、五經いずれの跋文にも特殊稱呼はなく、松永自身は「當該形態」の注記について明確な稱呼を意識していなかった可能性もある。

つまり「當該形態」について鼈頭という言葉での認識は、一部ではかなり早くからあつて、宇都宮の場合では寛文初期ごろのものからそうした認識があり、鶴飼石齋の『四書大全』の事例もその一環であつたと判断する余地はあろうかと思われる。ただ「鼈頭」という稱呼の定着度はまだ低く、たとえば寛文六年刊後印の『無門關』などは、版心に「首書」とあり、題簽に「鼈頭」とある。これは寛文六年初刊の時點では「首書」が生きており、後印時における題簽貼付の段階で、「鼈頭」が使われたと考えられる例であろう。

その後鼈頭の呼び名は確實に定着していく。寛文十年中野宗左衛門刊『北溪先生性理字義』では題簽は「首書」ながら、熊谷立閑跋には、

每涉獵四庫之墳典、輯其字訓拾其出處、別爲鼈頭表題。

「四庫の墳典を涉獵すること、其の字訓を輯め其の出處を拾い、別に鼈頭表題を爲す」

とあり、延寶八年山本長兵衛刊『魁本大字諸儒箋解古文眞寶後集』の生駒登跋には、

采摭其典據類語、而徧揭之鼈頭。

「其の典據類語を采摭して、徧ねく之を鼈頭に掲げ」

とあり、天和三年刊『新刻助語辭』、元祿四年刊熊谷荔齋注『四書大全』、元祿十年武村新兵衛印『魁本大字諸儒箋解古文眞寶前集』ではそれぞれ版心・題簽とも「鼈頭」となり、元祿十二年文臺屋次郎兵衛刊『鎮州臨濟慧照禪師語錄』の沙門大智跋には、

集類纂要、系此鼈頭。

「類を集め要を纂し、此を鼈頭に系す」とある。

これらの事例はすべて「當該形態」の文献において表れる事例であることを再度確認しつつ、以上の點から考慮すれば、「頭書」「標注」は二段本などの事例を含んで「當該形態」の専有名ではなく、「冠註」は事例が少ない上に未確認情報が多く、しかも江戸初期段階では全く見られないものであった。かくすれば、「當該形態」に對する呼び名としては、「首書」と「鼈頭」が最も妥當性が強かろうと思われるのである。

そこで再度問題にするべきは『日本古典籍書誌學辭典』の記載である。「鼈頭」の説明中に、「本文の上層部に設けられた註釋。首書・頭書と同じ。首書・頭書が我が國の古典文學に頭注を付したものについて言われるのに對し、鼈頭は……漢籍關係の書の書名に用いられた」とある。ここで「鼈頭」が漢籍關係に用いられた語であるというのは問題ないとして、「首書」・「頭書」が云々とあるのは、此までの説明で事實誤認であることがわかりであろうと思う。恐らくこの項目担当者は國文系の文献を中心に解説されたものであろうが、これによって「首書」との呼び名は「當該形態」の漢籍専有のものではないことを逆に証明している譯であって、「當該形態」の呼び名としては、やはり「鼈頭」が最も妥當な呼び名であると結論づけてよいと考える。

「鼈頭」の語が中國起源の語であることもその妥當性を高めてはいるが、これを書籍の一形態に結びつけたのは江戸時代の漢學者であったかと思われる。私の知る範圍においては中國古典に同様の使用例はない。また單に鼈頭の語が書籍の上層部のみを指すものではないことも、この語の使用例が當初「當該形態」の文献に限られることでも明らかであろう。龜の頭が皮から出てくる状態は、まさしく「當該形態」の方が二段本よりはそれらしいと思うのは我田引水であろうか。

なお明治期に入ると、二段・三段本が鼈頭と呼ばれる事例が壓倒的に増加するが、これは恐らく元祿頃以降ほとんど「當該形態」の文献の新刊がなく、幕末ごろには鼈頭の語の本來の意味付けも忘れられた、あるいは實感を伴わなくなったとい

うことではないかと考えられる。

以上のことから、「当該形態」の文献を今後は龍頭本と呼ぶことで問題なし、と判断することとしたい。

二 龍頭本の特質

1 出版状況について

さて次に考察すべき問題として、龍頭本が和刻本漢籍特有の形態であることを踏まえて、龍頭本の持つ特質について、多方面から検討を加えてみたいと思う。

すでにこれまでの説明中にも觸れたことではあるが、龍頭本の出版状況について注目すべき現象があることから述べることにしたい。このことについては、實は『古文眞寶』の版本について氣づいたことがこの發端にある。私事にて恐縮であるが、ひところ『古文眞寶』の版本を収集していた時期があつて、版の相違するもの（これは同版であつても後刷りや補修については別として計數）を百點ほど収集した。それについて全體を見渡したところ、龍頭本は五點を數えたが全てが元祿十年以前の出版で、その後の他文庫等の調査によつても元祿以前という状況に變更はなかつたのである。そこで『古文眞寶』以外の文献にまで調査の範圍を廣げてみたものが、表2「和刻本漢籍龍頭本年表」である。

あくまでこれも私の調査のなかで實見したものを表にした譯で、これで全てということではないことを予めお断りしておく。表の見方については、表末の凡例を参照されたい。收藏機關は略稱となつており、筆者個人の調査範圍のためローカルなものもある。⁽⁴⁾

さて本表によれば、正徳二年の『傳習録』の出版以降、次の新刊龍頭本の出版が天保六年『祖英集』であるから、この間

優に百年強の開きがあるわけで、正徳までを江戸前期鼈頭群と捉えたとすると、その後の鼈頭本の発行は天保弘化明治に各一點ずつで、それ以前に比較して極めて寥々たるものであることが判明する。ただ実際には正徳以降も鼈頭本が出版されない譯ではない。ただしそのほとんどが新刊ではなく、元禄以前の鼈頭本の後印や再刊本であって、しかも再刊はすくなく後印が殆どであることに注目したい。このことは版木の彫り直しすらあまりなされていないことを示しているのである。

以上のことから江戸時代二百六十四年のうち鼈頭本の新刊は、おおむね前期百年ほどの間に集中したことになる。徳川綱吉の治世が終わり吉宗の改革が始まる前のことである。そうした歴史的事項と鼈頭本の出版のこととなんらか関連することがあるのか、といった問題をも念頭に置きつつ、これからはいささか鼈頭本の内容や、それに係わる學者たちの意識を見たいと思う。

2 鼈頭本出版の目的その他

資料としては鼈頭本に付された序跋を中心に、まずはそこに書かれた各書の目的や、現状認識等をピックアップしてみることとしたい。

表2「和刻本漢籍鼈頭本年表」掲載の鼈頭本のうち、注解者の序文跋文等の付されたものはさほど多くはない。江戸前期までのものに限ってみると、刊語のようなものも含めて約二十点ほどあるに過ぎない。もともとこの時期において鼈頭注に關わった人物を特定できる書物それ自體が二十四点で、全體五十五点の半数にも満たない状態である。そこでまず年表から、特定できる人名とそれぞれの注解文献数を見てみると、

藤原惺窩	一 (元和五年)	林羅山	二 (明曆三年)	松永寸雲	六 (延寶八年)	徳倉昌賢	一 (延寶頃)	釋
交易	一 (延寶頃)	山崎闇齋	一 (天和二年)	熊谷嘉齋	二 (元禄頃)	毛利貞齋	一 (元禄頃)	釋大智
一 (元禄頃)	宇都宮遜菴	六 (寶永六年)	寺井養拙	一 (正徳元年)	三輪執齋	一 (寛保四年)		

となり、龍頭本著作を複数もつ人物は四名、なかでは松永寸雲と宇都宮遯菴が群をぬいているといえよう。括弧内はそれぞれの卒年である。

なおこれはあくまで私の實見した範囲であつて、『江戸時代漢學者傳記著作大辭典』などを見れば、林羅山などにはまだ數點、毛利貞齋にもかなりの量があると思われる。また松永寸雲の父の尺五、さらには熊谷荔齋およびその父活水にも龍頭本の著作がありそうであるが、すべて今後の課題としたい。

さてこれら序跋の内容であるが、まずはそれぞれ六點の著作のある松永寸雲と宇都宮遯菴のものを検討して、彼らの龍頭注に對する立場や意圖を確認してみたいと思う。

まず時代の古い松永寸雲については、寛文二年京都田原仁左衛門刊『魁本大字諸儒箋解古文眞寶後集』と、寛文四年野田庄右衛門刊『五經集註』都合六點が資料として存在している。『古文眞寶後集』跋に、

愚按、此集者爲小學生輩所編也。此故文皆匪純粹……本朝腐儒近代泥之者、不知讀文選文鑑韓柳歐蘇文章正宗文章辨體等書。是以不履文章之蹊徑、無闖貫道之門牆。先師惺窩先生、其憂之也深。故輯撰文章達德錄若干卷、而便于後學。嗚呼可謂傑出之才卓越之智。所恨者全篇未刊行于世矣。今我雕蟲篆刻、表章於典故發揮於文體、專欲便于幼蒙初學。

（師藤原惺窩は、近代の腐儒は文章の道筋をふむことをしらず、いたずらに遠大な目的に進もうとして道理に通じなくなっているとし、着實な學風を喚起しようとしたが果たさず、これをうけて自分は典故を表章し、文體を發揮して、専ら幼蒙初學に便宜をはかろうとした）

とある。本書は松永自身が跋文冒頭で、「此の集は小學生輩の爲に編む所なり。是の故に文皆純粹にあらず……」というように、一種入門書的な文獻であるから、「典故を表章し、文體を發揮して、専ら幼蒙初學に便ならんと欲す」ということになるのは當然ともいえよう。

一方『五經集註』それぞれの跋文では、各經典注解における基本文獻を明らかにしている。おおむね宋・元・明の新注系

の文献名が列挙されるが、五經そのものは『魁本大字諸儒箋解古文眞寶後集』のようなかならずしも初學用の文献とは言えないものの、実際には藩校郷學等の初等教育における素讀の對象とされる例が多いものであり、『禮記集說』跋に、
爲初學蒙士之譚柄、潤色而已矣。

「初學蒙士の譚柄と爲し、潤色するのみ」

といい、やはり入門的意識で註釋することが述べられている。

さらには『易經集註』の註釋に明蔡清の『易經蒙引』を取り上げること、その他の註でも多く元明の諸說を引証とするなどは、學問の正統性よりはとりつきやすいものにまずは頼るといった意味で、『古文眞寶後集』跋にみえる「専ら幼蒙初學に便ならんと欲す」ることに意識としてつながるものがあるかと思われる。『詩經』の跋に、

元明諸儒之說、以便同志後學之徒者也。

「元明諸儒の説は、以て同志後學の徒に便あらんものなり」といい、『易經』跋文に、

且又以元明諸儒之說、爲談柄矣。

「且つまた元明の諸儒の説を以て談柄と爲す」というのも、『禮記集說』跋の、「初學蒙士の譚柄と爲し、潤色するのみ」とあるのとおなじ趣旨であろうと思われる。

要するに松永の場合は、詩文においては典故を表彰しあるいは文體を發揮するのに對して、思想においては元明諸儒の諸説を引用するとの違いはあるものの、いずれも初學幼蒙の理解を助ける初心者向けの註釋を指すものであったといえよう。

では宇都宮遯菴の場合はどうだろうか。宇都宮には、寛文四年野田彌兵衛刊『新刊錦繡段』・寛文五年武村三郎兵衛刊『魁本大字諸儒箋解古文眞寶前集』・延寶六年京都吉野家權兵衛刊『近思錄』・貞享元年野田彌兵衛刊『新刊錦繡段』・元禄二年跋刊京都淺見吉兵衛後印『忠經集註詳解』・元禄十年京都武村市兵衛刊『魁本大字諸儒箋解古文眞寶前集』の六點があ

る。このうち『新刊錦繡段』の跋文にはほとんど見るべき内容がないので省略し、寛文五年『古文眞寶前集』から見ることにしたい。

本朝之學者、專好後集講說之。此故或鼈頭、或諺解、有便于後集者不爲不多（以上既出）。至於前集、則讀之者鮮矣。是以幼學之士、不能知其義。

「前集に至りては、則ち之を讀む者鮮し。是を以て幼學の士、其の義を知る能はず」

という。ここでは『古文眞寶後集』のほうが人氣があつて、鼈頭、或いは諺解の注の便宜があるが、前集にはそれがなく、初心者にとつて不便であるので、前集に評注をつけてわかり易くしようというのである。ここで重要なことは、幼學のもののために後集には鼈頭や諺解があるということであつて、鼈頭注の存在意義がおのずから示されている。

このことは、『近思錄』の跋に、

嘗聞、近思錄四子之階梯。我又欲階梯近思錄、而示後學升堂之道。……庶下國遠鄉乏載籍者、見之爲博學篤志之便。

「嘗て聞く、近思錄は四子の階梯なりと。我又階梯を近思錄に欲して、後學升堂の道を示さんとす。……庶はくは下國遠郷の載籍に乏しき者、之を見て博學篤志の便となさん」

という、宋學の頂點にいたるための階梯のそのまた階梯を作ろうとするといひ、また文化の及びがたい遠方でも學問の恩恵に預かれることを目指しているといひ、いずれも基本的には初學者や幼年少年を對象とすることと同趣旨である。再度注した『古文眞寶前集』跋にも、

余嘗作講義標題于古文前集。……庶乎有助幼學者」

「余嘗て講義標題を古文前集に作り、……庶はくは幼學を助くるもの有らんと」

としている。これらの表現は、明らかに松永のいう「幼蒙の初學に便宜をはかる」ことと同様である。ただその方法として、どういった注解をほどこすかについては今一つ明確ではないが、『古文眞寶前集』では、

今也稽經史子集、標題于此書、庶幾與吾同志者、見之而易曉矣。

「今や經史子集を稽して、此の書に標題して、庶幾はくは吾が同志の者と、之を見て曉り易からしめんことを」といい、『近思錄』では、

校此於四先生之全書及易詩書語孟、其餘可解此書者、朱子語類性理大全等若干編、彙集細釋之。

「此を四先生の全書及び易詩書語孟に校し、其餘の此の書を解すべき者は、朱子語類性理大全等若干編、彙集して細く之を釋す」

といい、古典や類書を博搜して文義を明らかにしようとするものであることは明白であろう。

典據を求め、字義字訓を明らかにすることそれ自體は、註釋という行爲の一般的な内容であると思われるが、そこに童蒙・幼蒙を對象とするという意識が加味されるところが、松永、宇都宮兩者に共通するところである。跋文中に諺解と並列して鼈頭が語られ、一方では鼈頭注を講義標題と認識する點にも、初學者對象との認識は讀みとれるのである。ちなみにそうした方向性は、熊谷荔齋が『北溪先生性理字義』跋で、「四庫の墳典を涉獵することに、其の字訓を集め、その出處を拾い、別に鼈頭表題を爲す。此の書庶幾はくは童蒙の士の一助たらん」というのにも共通するもので、鼈頭本そのものの基本的方向性とみなしてよいように思われる。

3 諺解本と鼈頭本

ここである諺解とは、漢籍の國字解や抄物を指すもので、鼈頭本が出現するよりはやく我が國独自の註釋方法として確立されたものである。なかでも抄物の成立は室町期にまで遡り、そこには講義録としての性格が色濃く表れているとの指摘がある。^⑤では實際に鼈頭注が諺解や抄物との内容や性格に涉る關連性を持つものなのか、まずは兩者の比較によって検討してみたい。

ここではまず『錦繡段』を取り上げるが、これは宇都宮遯菴には、萬治四年跋刊『新刊錦繡段鈔』という抄物、および寛文四年野田彌兵衛刊『新刊錦繡段』という鼈頭本があり、さらにより古くは足利義尚の文明十五年天隱龍澤編の『錦繡段鈔』があつて、これらの比較によつて、抄物から鼈頭への沿革がある程度明白となる可能性があるからである。今回の報告では天隱龍澤編の『錦繡段鈔』は寛永六年京中嶋久兵衛の古活字版を使用している。

紙数の都合上、序文や冒頭の書名等の注解は省略して、巻頭の天文類から詩題「春月」とその内容部分を取りあげて比較してみよう。

古活字版『錦繡段鈔』の構成は、冒頭の序文に續いてまず類目説明、

天文 天文トハ日月星辰風雨雪霜之類ヲ云ソ。是等ハ皆天之文章ソ。

があり、次に詩題説明が典據を引く形で、

春月 春月トハ、類説東坡在汝陰、初春庭梅盛開、月色鮮霽。夫人曰、春月勝如秋月、云々。秋月令人悽慘、春月令人和悦。云々。坡笑曰、子誠知言召客飯。

がくる。つぎが「春月」詩の本文、

柳塘漠々暗啼鴉 一鏡晴飛玉有華

好是夜闌人不寢 半庭寒影在梨花

次いで、

一ノ句八月ノ欲出時分ソ。日暮柳塘ノ邊ニ鴉欲栖柳ソ。柳藏鴉トテ鴉ハ柳ニモスムモノソ。其時分月出で如玉鏡也。

三四ノ句ハ、夜深テノ景也。自黄昏到五更之月也。晏元獻詩云、梨花院落溶溶々月、柳絮池塘淡々風。トテ梨花ト月ト相

映ジテ一段面白ソ。爲愛此梨花影、到夜闌不眠也。此詩言、黄昏ヨリ五更ニ出ル月ソ。王荊公詩云、春色惱人眠不得、

月移華影上欄干、云此詩心ソ。月入中庭欲睡遲。

私云、趙嘏詩云、長笛一聲人倚樓。故號趙倚樓。倚欄干倚樓ハ倚ノ字ヲ書ソ。宗敬詩、明月梨華一洞雲。是モ此詩ト一意也。明月梨華一待春。

漠々廣貌也。退之詩、柳華飛漠々、月華星彩坐來收。

といった句ごとに語釋や典據、關連資料などをとまって説明される。

つぎにこの説明と重複するときの注解が、以下のように繰り返される。

春月

押首ニ春月ノ詩ヲノスル事有子細。天文ニテ八月カ第一ソ。月ハ秋カ本ナレトモ、春ハ四時ノ始メナルホトニ、彼ト云此ト云、マツ春月ノ詩ヲ押首ノセタソ。本語ニモ、春月勝秋月ト云事カアルソ。又古歌ニモ、テリモセスクモリモヤラ又春ノ夜ノヲホロ月夜ニシクモノハナシ、ナトトモヨメタリ。

一二句ハ月欲出時分也。柳塘ノ邊ニ鴉モトマリテ、日暮後月出如鏡也。華ノ字ハ月華ノ字ニ付テ云也。

三四句ハ、夜フケカタノ月也。晏元獻詩云、梨花院落溶々月、柳絮池塘淡淡々風。梨花與月相映ジテ一段面白ソ。爲愛此梨花寒影、到夜闌不眠也。此詩言、自黄昏到五更之月也。與荊公詩云、春色惱人眠不得、月移華影上欄干、之詩一意也。

先の詩解とこの詩解とのアンダーラインの部分について比較してみると、殆ど同じ事を述べているほか、引用される關連詩（宋晏殊の詩）も同様である。ただ前半においては、「私云」において直接關連のない趙嘏詩（唐人）、梨花にかかわる宗敬詩、それから漠漠の語釋と典據があるがこちらにはないこと、後半には冒頭に本書を「春月」から始める理由説明と「古歌」の引用があるが先にはなかったこと、こうしたちがいがあ

さらに最後にもう一度、「私云」が出て、全體説明を繰り返し、動靜の論議において總括することになる。

私云

一句言ハ、柳塘ノ邊ニ烟カ漠々ト起キテ、ハヤ日暮ニナツタソ。今ハ鴉ノ色ハミエス、啼ク聲ハカリ聞コエタソ。サルホトニ暗啼鴉ト作タソ。春日ノ暮ツカカノテイヲアリト作タ。月モハヤ出テサフナル時分ソ。

二ノ句言ハ、今マテ柳塘ノ邊ニハ暮烟漠々タリシカ、ホトナク鏡ノ如クナル月カ出タソ。玉有華トハ、此月ハ玉ヲミカキタテタル如クニ見事チャト云義ソ。

三ノ句ノ好是ハ、二ノ句ノ月ニ好是ソ。夜闌トハ夜半過ト云義ソ。アマリニ此月カ面白サニ、夜半過マテイネナシタソ。

四ノ句ノ意ハ、ヨイヨリ夜半マテハ月影カ一庭ニ滿々タリシカ、ハヤ夜モフケヌレハ、月影モ漸半庭ニナルソ。サテ其時分ノ月影カ、イカニモスサマシクシテ、梨花ノ白ニ相映タルカ一段面白ソ。

捻シテ此詩ハ、動靜ノ二ツヲ作ソ。一二ハ動、三四ハ靜ソ。柳塘昏月雖佳、啼鴉猶喧。夜闌之後、群動已息、梨花寒影可愛焉。若依此義、三ノ句ノ好是ハ四ノ句ニカケテミルヘシ。

呂中孚ハ、中州集第七二、字信臣、冀州南呂人、云々。累年不第、以詩文自娛。有清漳集、行于世。其賦紅葉云、張園多古木、蕭寺半斜陽。先君子甚愛之、云々。

ここでも点線アンダーライン部分に象徴されるように、さきの解釋とおおむね同系の注解が付されてはいるが、この説明はかなり詳細に内容の流れをくみ、さらに詩の構成にまで及ぶ論議であつて、先の説明より内容の深まりが感じられる。またここでいう「私云」がだれのことか明らかではないが、その解釋は誰その説にこうあるというものではなく、その私自身の解釋を嚙んで含めるように述べているようである。

最後に總括と作者紹介がなされて、「春月」の解釋は終わるといふ構成である。説明や記述が重複したり錯綜するところがあつて、全體の構造としてはいささか幼稚さを露呈している部分もみられるが、内容的には自説の提示をも含めて、幼學のために作られた解説書としての使命を果たしたものと評價してよいであろう。

次に萬治四年跋刊『新刊錦繡段鈔』を見てみたい。比較範圍は前資料と同じである。まず冒頭に類目説明と詩題説明があり、これはほとんど古活字版の内容を踏襲している。以下の資料を参照されたい。

天文 天文トハ日月星辰風雨雪霜之類ヲ云、是皆天ノ文章也。易上繫辭云、仰以觀於天文、俯以察於地理。

春月 是題ヲ卷頭ニラクコトハ、春ハ四時ノ初メ月ハ天下ノ壯觀、其ウヘ日月ハ天文ノ第一ナレバ也。況此詩深淵幽微ナルヤ。コトニ春月秋月ニマサルト云テ、面白キモノソ。古歌ニ、昭モセスクモリモヤラヌ春ノ夜ノ朧月夜ニシクモノハナシ

〈事文類聚〉前集二 元祐二年正月月、東坡先生在汝陰、作初登梅州堂前梅華大開、月色鮮霽。王夫人曰、春月色勝如秋月色。な
秋月色令人悽慘。春月色令人和悅。云々

呂中孚 〈中州集〉第七日、呂中孚、字信臣。冀州南呂人。孝友純至。迄今爲卿人所稱。な累舉不第。作年以詩文自娛。有清漳集、行于世。其賦紅葉云、張園多古木。蕭寺半斜陽。先君子甚愛之。

ここでは先ず類目説明に書名・編名を銘記した典據が示される。次に詩題説明として、まず冒頭に「春月」を配することの説明を置き、つぎにそのからみで日本の「古歌」を配し、さらに古活字版にもあつた典據を、書名巻數明示のうえで引用している。つぎに作者の紹介を置くが、前書に比較して、この位置にあるほうがよほど自然で判りやすいと思われる。なお

二重アンダーラインは前書と重複する解説あるいは引用、また引用中の太線のラインは前書と異なる部分を示す。次に詩の本文がきて、全體の詩解釋に續く。句ごとに説明があるが、二重アンダーラインの部分は古活字版と類似もしくは同様な解説である。

漠々廣貌也。又靜貌又茂也。一日寂寞貌又冥貌、末ノ春日ノ作ニモ見エタリ。

一二ノ句、柳塘ノ漠々タル處ニカラスカ宿シ、鳴ガ日グレノコトナレバ色ハ見ヘス。鳴聲バカリ聞ユル故ニ闇啼鴉ト云ゾ。

サル折シモ鏡ノ如クナル月ガ出ルゾ。玉有華トハ、月ニ光アリト云ンガ如シ。華ノ字ハ光華トテヒカリ也。月華星彩坐來收ルト云モ月光ノ義也。サルホトニ、花ノ字ニキラハサルソ。古詩ニモ破鏡飛上天―作テ月ヲ鏡ニタトユルソ。一ノ句ハ月ノ出ントスル時分、二ノ句ハ月ノ出タルヲ云。皆日暮ノ景也。

三四ノ句ハ、夜深テノ景也。好是ノ二字詩中ノ眼ナリ。幸ニ是ト心得ヘシ。江湖集ノ卷頭ニモアリ。夜闌ハ夜半過ノコトナリ。半庭トハ、夜半過ノ月ナレハ庭一ハイニハササズシテ、庭ノ半分ニ影ガアルゾ。半庭ニテ曉ヲ含ソ。寒影ハ月ノ影也。一説ニ梨樹ノカゲト云ヘリ。言ハ、アマリ月ノ面白サニ夜半過マデ不寐シテ賞翫スルソ。月バカリニテモ面白キニ、況ヤ庭前ニ梨花ガ有カ月ノ影ニ映ジテ面白ソ。王荊公カ詩、春色惱人眠不得。月移花影上欄干。此詩ノ心ソ。又晏元獻詩云、梨花院落溶溶々月。柳絮池塘淡々風。ト云心モアリ。

○捻ノ心ハ、春ト云ヒ月ト云、心ヲ風光ニトラレ、ヨイヨリ曉マテ子ムラスト云ギナリ。言ハ、春ノコトナレハ、面白サニマダ宵ヨリ立テミレバ、柳ノ辺ニトマリガラスガ鳴。其折節月ガ鏡ノ如ニテ出タゾ。殊ニ月ト梨花ト相映、景ヲマスホトニ、夜ノ深モシラズ月ノカタフクマデ不寐シテナガメタソ。或云、此ノ詩動靜ノ二字ヲ作レリ。一二ノ句ハ動三四ハ靜ナ

リ。

ここにみられる詩解釋は、句の展開を踏まえて首尾一貫した解説となっているが、古活字版にみられた解釋を踏襲するものが多く、特に新味は薄いものといわざるをえない。ただ句ごとの説明とその後、全體總括を置いて、論旨を明晰にした部分は、宇都宮の努力の跡の見られるところで、重複もなく極めてすっきりと纏められたものであることが判る。

つまり宇都宮は本書の編纂において、おおむね天隱本を踏襲しながら、これを簡明に理解しやすい形に編集し直したということであり、まさに本人のいう判りやすさ、童蒙の士のための諺解といった立場を、明晰に實踐してみせたことになるであらう。

次に同じく宇都宮の手になる鼈頭本『新刊錦繡段』を見てみたい。

天文

天文者、謂天之文章。日月星辰風雨雪霜之類是也。○易上繫辭云、仰以觀於天文、俯以察於地理。

春月

以此題置卷頭者、春四時之首、月天下之壯觀也。又論天文則日月爲之最初矣。然則以春日不爲始何哉。曰、凡詩客文人賞翫月色也。倍菴日景、其由來尚矣。不遑記之。況此詩語路優長意味深淵乎。所以置于卷頭也。古人有春月勝秋月之論。○事文類聚前集二云、元祐二年正月、東坡先生在汝陰、州堂前梅花大開、月色鮮霽。王夫人曰、春月色勝如秋色。秋月色令人悽慘。春月色令人和悅云々。○東坡詩曰、春宵一刻值千金、花有清香月有陰。

呂中孚

中州集第七曰、呂中孚、字信臣。冀州南呂人。孝友純至。迄今爲卿人所稱。累舉不第。以詩文自娛。有清漳集、行于

世。其賦紅葉云、張園多古木。蕭寺半斜陽。先君子甚愛之。

まず冒頭の類目・詩題・著者事項であるが、これはほとんど萬治四年本と同様で、ただ二重アンダーラインで示した部分、こちらは全文漢文となっていること、「春月」を冒頭におくについて、さらに説明が合理化されていること、関連資料として新たに、詩題については東坡詩が付されたことなどが指摘できる。

次いで内容を見てみると、これは一種驚くべき簡略化がなされており、詩の内容にかかわる説明はほとんど消え、語釋が中心となっていることが判る。それもごく限られた語について、典據や諸説を集中して取り上げるといふ方法をとっており、これは明らかに宇都宮の意圖的作爲として説明するしかない事態といえよう。ここでは「漠漠」と「一鏡」についてのみ注記されているが、あえて多様な事例を列挙して、注意を喚起するといった意圖であろうか。ここでは、『字彙』の漠々の説明と、王安石の詩（二重アンダーライン部分）のみが前書と係わるものである。

漠々

韻會云、漠施也。茂也。○字彙曰、廣也。大也。○一曰、漠漠寂漠貌。○文選二十二、謝玄暉遊東田詩云、生煙紛漠漠。註云、漠漠布散也。○杜詩云、兵戈塵漠漠。○韓文九云、柳花還漠漠。○三體詩、愁雲漠漠草離離。又云、江籬漠漠荇田田。○詩人玉屑云、江頭楊柳暗藏鴉。○曾鞏詩、欲深烟柳已藏鴉。

一鏡

文選謝希逸月賦云、柔祇雪凝、圓靈水鏡。注、善曰、柔祇地也。圓靈天也。銑曰、言月之光彩照地如凝雪、照天如水鏡。○李白地酒問月詩云、月却與人相隨、皎如飛鏡。○三四句、以王荊公之詩所謂春色惱人、眠不得月移花影上欄干之心可觀焉。

網羅的な説明をせず、特定の語釋に集中することについては、「春月」に次ぐ「京城翫月」以下においても同様で、おむねこうした傾向で終始しており、本書全體にかかわる注解の形であるといえる。もつとも抄物の内容には、俗語假名文字による説明部分のほかに、漢籍の引用や中國人の諸説引用における漢文部分が混在しており、必ずしも全てが假名文であるわけではない。漢文のみで記述される鼈頭本において、典據の明示や諸説の引用が壓倒的に増加している状況は、抄物における漢文部分を集中して拡大した結果であるとする見方も可能であろう。ただその他一般の鼈頭本を参照してみても、おむねこうした増加傾向があることは事實であつて、むしろこうした傾向それ自體が鼈頭本獨自の特質であるといえるかもしれない。

そのことについては、今少し他の事例によつて検討してみたい。今度は異なる註者による同一書への註釋の變化に焦點をあて、江戸初期刊藤原惺窩註『四書大全』と、元祿四年京都書肆刊後印本熊谷荔齋註『四書大全』の二點をここではとりあげる。いずれも『四書大全』を底本とした鼈頭注本であるが、ことは膨大な量に及ぶため、その『論語』の冒頭の部分、つまり學而篇の第一章冒頭「子曰、學而時習之、不亦樂乎」の部分のみに限つて比較してみたいと思う。

表3 「論語集註 惺窩本・荔齋本引用諸説對照表」を参照されたい。ここでは本文と朱子註の展開にそつて鼈頭注の項目をならべてある。註の内容を全文資料として提示する余地もないので、それぞれの一部を紹介してある。兩者の註の繼承關係については、本資料末尾の「引用諸説重複關係表」をも参照されたい。たとえば左最下部の『四書蒙引』については「②の」となっているが、これは惺窩本に三例あり、その内の二例は荔齋本に重複しており、なおその他に九例が荔齋本にみえるということを表す。つまり惺窩本には三例あり荔齋本には十一例ある、その内の二例が重複しているので、全體としては『蒙引』からの引用は兩者あわせて十二例あるということになる。

全體として概觀すれば、諸説引用の項目數は惺窩本が十九、荔齋本が六十四でほぼ三倍強となる。また惺窩本の十九例の

うち十四例が荔齋本に重複しており、熊谷荔齋による惺窩本の繼承率は七十四パーセントである。重複しなかった五例の内訳は、まず元好問『中州集』の時習齋詩の引用と『韻會』による浹洽の説明がある。于文虚中の詩を引くことにどれほどの意味があるか不明であるし、『韻會』にかわって『洪武正韻』を引いているので、こちらのほうが權威ある解説といえそうである。ただそれ以外の三例（特に二例）についてはいささか思想的な背景がありそうである。謝良佐の『論語』顔淵篇にからめた説を略したについてはその意圖がはっきりしないが、『知新日録』と『蒙引』の一部を略したについては、陽明學的言辭への拒否反應がありそうである。特に『知新日録』には陽明の「去私存理」と近溪の「因時亦在其中」が引かれており、近溪は王學左派の羅汝芳である。また『蒙引』の一部については、やはりその中に心と理に係わる言辭、あるいは知行にかかわる言辭があり、王學的方向性が見えるものである。惺窩はこれらをさほど意識しなかったが、熊谷はかなり神経質になっているという變化がみえるといえようか。實際に『四書大全』の跋で熊谷は、

別專私議、謗削朱註之徒、朱門之異端、俚儒之好事也。

「別に私議を専らにし、朱註を謗削するの徒は、朱門の異端、俚儒の好事なり」といつている。まさしく陽明學關連の諸説はこれに該當したのであろう。

しかしこれらの思想的な變化はここに示した例のみではごく微妙なところであって、全體にわたる比較が必要となろう。ただ熊谷の學風が惺窩の宋學的方向性を繼承していることはまずまちがいないのであり、熊谷が惺窩に直接師事したかは不明ながら、『北溪先生性理字義』の跋文で熊谷が、

前羅山林公有諺解數卷行于世。學者得其捷徑。余亦概吮其餘唾。

「羅山の餘唾を吸う」等と謂っていることと相まって、熊谷を惺窩の學統に位置付けうる人物とすることは妥當であると考ええる。惺窩説繼承率七十四パーセントというのもその裏付けと見なしてよいであろう。

さらにより明白で重んじるべき特徴は、まず兩者に共通する特徴として、先學の諸説を引用することは多々あって、自説

をのべることを極めてすくない（ほとんどない）ことがあげられる。本文の内容理解のための諸説引用であるにせよ、自説によつての説明がないことは、先に述べた宇都宮の鼈頭本『錦繡段』の註もほぼ同様である。この傾向は實はその他の鼈頭注においても殆ど共通していえることで、鼈頭注とはそもそも自説を展開する論ではありえなかったというのが實のところであるかもしれない。このことは二段評注などにもいえることで、本文外側にごく軽い安易な注解を添える形式として、二段註が成立したのが明代嘉靖ごろからであるが、我が國においてもそれを導入してまず二段本いわゆる「首書」本ができ、それが鼈頭本成立のきっかけになったという筋道は、容易に想定できるのではあるまいか。

ほとんど同系統の註釋内容であるとすれば、次に問題となるのは、熊谷註のどこに新たな存在意義があるかということになるろう。

『四書大全』の熊谷跋文に、

大凡衆說之符朱意、概以錄之。如虚齋十得八九、間亦附一二之異見、倍以顯至當之正理、是欲後進討論之一助。

「おおよそ衆說の朱意に符するもの、概して以て之を録す。虚齋のごときは十に八九を得るも、ままた亦一二の異見を附し、倍して以て至當の正理を顯らかにせんとするは、後進討論の一助たらんと欲せばなり」

とあるのが、『四書大全』鼈頭注の中心的意圖であろうかと思われる。およそここでは朱子の意圖と合致する説を網羅すること、たとえば蔡清の『蒙引』など九割方採用されている。ただすこしばかり自説をいれたところは、後進討論の手助けという、童蒙幼學への配慮がなせる業であろう。

結語にかえて

つまり松永や宇都宮にみられた鼈頭注の性格をなおも意識しつつ、むしろ宋學系の諸説を類書のごとく網羅するところ

に、熊谷『四書大全』鼈頭注編纂の趣旨があつたのではと考える。このことは宇都宮の鼈頭注にもすでにいささか傾向として現れたことであるが、童蒙幼學のものにとつてこうした註が果たしてどれほど必要であつたかは、かなり問題ではなからうか。鼈頭注が當初諺解や抄物編纂の流れのなかで意識された時點で、そうした初學者向きの内容はまさしく繼承されたに違いない。しかも諺解や抄物は假名文字による當時の俗語文體で書かれており、その内容も詩文等の内容解釋を中心としたものであつた。それが宇都宮『錦繡段』鼈頭注のような、内容解釋の全くない、そのかわり特定の典據を多數網羅して語釋の助けとするような傾向に變つたのであれば、そこには初學者を對象とした編纂ではなく、むしろ教授者あるいは學者の受容に答える方向性が芽生えたという、需要の變質が考えられるように思われる。

このような鼈頭注の詳細化という傾向は、羅山註の『老子虜齋口義』の正保五年版から明曆三年版への變化、註者不明ながら『孝經大義』の明曆三年版から寛文七年版への變化、さらに同じく註者不明の『新刻助語辭』の天和三年版から享保二年版への變化にもいえることである。⁷⁾

そしてそうした變貌は、時の社会背景、江戸初期から元祿ごろにかけての儒學・漢學の徐々に隆盛していく状況、たとえば一つの到達點として將軍綱吉の個人的儒學志向のようなものにあわせて、初學者の學問への要求を受け止めるかたちから、徐々に一般の漢學者の成熟や學問内容の高度化によって、教授者がわの要求に應える形に變化したことを示してはいないか。そしてさらに、その後全国各地に藩校や郷學が成立し、漢學そのものの教育體制が充實し、大量の専門的教授者の育成に關わつて、教授資料的な鼈頭本の需要も減つていったため、鼈頭本のあらたな刊行も激減したという筋書きが、いまのところ筆者の想定する鼈頭本の變遷・沿革の實相である。

附記

最後に、これら鼈頭注を編纂した人物の師弟關係を見てみると、林羅山と松永尺五は藤原惺窩の弟子で、松永寸雲と宇都

宮遯菴は松永尺五と師弟関係にある。また確証はないものの、羅山は京都で藤原惺窩に學び、程朱學のかたわら老子口義を推奨したとされるが、熊谷活水も京都の人で老莊口義の頭書本の著作があり、年代も一致しており、生前交流のあった可能性はきわめて高いといえよう。さらにその息子の荔齋は、『北溪先生性理字義』跋のなかで、「前に羅山林公諺解數卷ありて世に行わる。學者其の捷徑を得て、余も亦其餘唾を概吮す」というのであれば、父子ともども惺窩羅山にかかわることはもはや明白であろう。また毛利貞齋も京都の人で、熊谷荔齋や宇都宮遯菴とも時代は重なっている。これらの人物がおしなべて鼈頭本に關わっていることに、時代的地理的なならかの必然性をみるのは、かならずしも不當なことではないと考える。

注

- (1) 舊版『和刻本漢籍分類目録』記載の版本總數三千二百七十一點に補遺や未著録本を加味した數値である。
- (2) 平成七年度の調査以前の實見數千二百八十點にその後の調査分を加味した。なお調査の關係上多少の佛典も含む。
- (3) 「當該形態」の文獻として「首書」の稱呼をもつ早期の事例としては、東京大學總合圖書館藏『老子虜齋口義』二卷・正保五年書林豊興堂刊本等がある。ただし題簽に記される例が多い。また例外として二段本に「首書」の稱呼を記す例としては、『新刊錦繡段鈔』萬治四年跋刊本の版心に「首書錦繡段抄」と記す例がある。
- (4) 參考までに年表註の收藏單位の略稱を確認しておく。
- | | |
|------------------------|--------------------|
| 東大總・東京大學總合圖書館 | 中川・佐賀縣鹿島市祐德神社中川文庫 |
| 諫早・諫早市立圖書館諫早文庫 | 多久・佐賀縣多久市歷史民俗資料館 |
| 普明寺・佐賀縣鹿島市古枝普明寺 | 小城・佐賀大學附屬圖書館小城鍋島文庫 |
| 二松圖・二松學舍大學附屬圖書館 | 佐伯・大分縣佐伯市佐伯藩政資料 |
| 多度津・香川縣多度津町林家舊藏漢籍 | 東洋文・國立國會圖書館支部東洋文庫 |
| 内閣・國立公文書館内閣文庫 | 鍋島・佐賀縣立圖書館鍋島文庫 |
| 佐師範・佐賀大學附屬圖書館藏舊制佐賀師範藏書 | |

- (5) 抄物と講義聞き書きの関係については、『室町時代語資料としての抄物の研究』上 柳田征司 一九九八年武蔵野書院刊 六頁「抄物作成の状況について」参照
- (6) 『明代版刻図釋』一九九八年北京學苑出版社影印本によれば、『詩經集傳』八卷嘉靖中吉澄刊本・『春秋四傳』三十八卷 嘉靖中吉澄刊本・『醫學綱目』四十卷 嘉靖四十四年刊本の三種がある。いずれも簡単な音注を上層に付したものである。
- (7) 鼈頭注の詳細化については、鼈頭注のそもそももつ方向性が實現されていく過程で、益々詳細増加の度を加えたものであろうが、當初からそうした詳細さを確立していた事例もわずかながら存在する。たとえば『魁本大字諸儒箋解古文眞寶後集』慶安元年校刊本などがそれで、鼈頭注の方向性の至るべき結果をすでに先取りした例であろう。

表 1-2 龍頭本特殊稱呼別分類年表

年代	首書	頭書	龍頭	冠註	標注(標記)	その他
正徳2刊 享保2刊 享保9印後印 天明6刊 天明7印 天明8印 寛政3跋再刊 寛政10刊後印 享和1重刊 文化12重刊 文政6印 文政8印 天保6刊 弘化3刊 元治中刊 慶應1刊後印 明治8刊 明治9印 明治12刊 明治17刊 明治18刊 明治中 明治中 明治中	周易集註 題簽 孝經大義 題簽 四書 版心 忠經集註 版心	字彙 題簽 詩經集註 題簽 書經集註 題簽 忠經集註 題簽 孝經 封面 詩經集註 題簽 詩經 題簽 *芥舟學畫編 題簽 周易集註 封面 書經集註 題簽	四書 題簽 孝經 封面 老子齋齋口義 題簽	新刻助語辭 封面 祖英集 題簽・序首 六祖壇經 卷首人名	傳習錄 題簽 *詩經 題簽・封面 *淮南鴻烈解 序首 *孝經 序首 *十八史略 題簽 *增補元明史略 心・簽 *芥舟學畫編 題簽 *孝經 版心・奥付	天和3重訂 寛文4刊 二段 寛文12刊 明暦3刊 寛文4刊 二段 寛文4刊 二段 延寶2刊 元祿2刊? 二段 寛文4刊 二段 二段 二段 延寶2刊 寛文4刊 寛文4刊
明治以降龍頭稱呼例						
明治14刊 明治14刊 明治15刊 明治16銅版刊 明治16銅版刊 明治17銅版刊 明治17刊 明治19刊 明治23刊 明治27重刊		龍頭韻府一隅 版心・題簽 龍頭五經 版心・題簽・封面 龍頭蒙求 版心・題簽・封面 古文眞寶前後集 題簽・封面・卷頭 龍頭康熙字典 版心・題簽 龍頭唐詩選 題簽 龍頭句解忠經 題簽・封面・卷頭 龍頭辨書四書 版心・封面 龍頭十八史略 版心・題簽 龍頭音註四書 題簽・封面				二段 二段 二段 二段 二段 二段 二段 二段 二段 二段

書名前に「*」があるのは、龍頭本でないものの特殊稱呼として該當稱呼が利用されている場合、および書肆の書日にみえて實見し得ていないものである。「明治以降龍頭稱呼例」は、書名その他に「龍頭」の稱呼を使用しているものを、實見の範囲で例示したが、すべて龍頭本ではなかつたことを示す。

表 2-1

和刻本漢籍龍頭本年表

年代・刊印修	書名(略稱)	特殊稱呼	特記事項	收藏	形式
正保5刊	老子虞齋口義	題簽「首書」	道春點 林信勝跋	東大總	龍頭
慶安1刊	古文眞寶後集			家藏	龍頭
承應2刊	三體詩法			中川	龍頭
承應3刊	補注蒙求	題簽「頭書」		諫早	龍頭
明曆3刊	孝經大義			多久	龍頭
明曆3印	老子虞齋口義	題簽「道春首書」	林信勝跋	東大總	龍頭
萬治2刊後印	法寶壇經	題簽「夾山首書」		中川	龍頭
萬治3刊	五家正宗贊			中川	龍頭
萬治3刊	臨濟錄			普明寺	龍頭
寛文2刊	古文眞寶後集		松永昌易注	二松圖	龍頭
寛文3刊	佛祖三經			普明寺	龍頭
江戸初期(寛文4以前)刊	四書大全	題簽「龍頭評註」刊語「龍頭評註」	藤原肅評註 鶴飼信之補訂訓點	東大總	龍頭
寛文4刊	周易	題簽「首書」	松永昌易跋	家藏	龍頭
寛文4刊	書經	題簽「首書」	松永昌易跋	家藏	龍頭
寛文4刊	詩經	題簽「首書」	松永昌易跋	家藏	龍頭
寛文4刊	禮記集說	題簽「首書」	松永昌易跋	家藏	龍頭
寛文4刊	春秋四傳	題簽「首書」	松永昌易跋	家藏	龍頭
寛文4刊	新刊錦繡段		宇都宮由的跋	個人藏	龍頭
寛文5刊	古文眞寶前集	題簽「龍頭評註」	由的跋龍頭の語あり	家藏	龍頭
寛文5刊	碧巖錄	題簽「合山首書」		中川	龍頭
寛文5修	莊子虞齋口義	題簽「頭書」	寛文3刊	家藏	龍頭
寛文6刊	永覺禪師晚錄	題簽「增補首書」		中川	龍頭
寛文6刊後印	無門關	版心「首書」簽「龍頭」		家藏	龍頭
寛文7刊	孝經大義	題簽「龍頭評註」		東大總	龍頭
寛文8印	小學			小城	龍頭
寛文9刊	大慧普覺禪師書			東大總	龍頭
寛文9刊	虛堂和尚語錄	題簽・封面「頭書」		普明寺	龍頭
寛文10刊	北溪性理字義	題簽「首書」	熊谷立閑注 序龍頭	東大總	龍頭
寛文10印	釋教編年通論			普明寺	龍頭
寛文11刊後印	三隱詩	題簽「首書」		二松圖	龍頭
寛文13刊	古文眞寶後集		書根「龍頭古文」	家藏	龍頭
延寶2跋刊	老子虞齋口義	題簽「增補首書」	德倉昌賢跋	家藏	龍頭
延寶2印	易學啓蒙	心「首書」簽「龍頭評註」	寛文9刊	佐伯	龍頭
延寶6刊	近思錄		宇都宮由的跋	多久	龍頭
延寶6刊後印	近思錄	題簽「龍頭」	吉野屋五兵衛後印	諫早	龍頭
延寶6跋刊	佛制比丘六物圖			普明寺	龍頭
延寶6印	永覺和尚瘰言	題簽「首書」	沙門交易編	中川	龍頭
延寶6印	禪家龜鑑	題簽「首書」		多度津	龍頭
延寶7刊後印	古文眞寶後集	題簽「合解評林」		東大總	龍頭
延寶8刊	科註妙法蓮華經			普明寺	龍頭
延寶8刊	古文眞寶後集	題簽「新增評註」	生駒登跋	家藏	龍頭
延寶8刊後印	佛法金湯			普明寺	龍頭
天和3刊	新刻助語辭	心「龍頭」簽「龍頭」		東大總	龍頭
天和3刊後印	楞嚴義疏	題簽「龍頭今釋」		中川	龍頭
貞享1刊	新刊錦繡段	題簽「新刊龍頭」	宇都宮由的跋 寛文4	東洋文	龍頭
元祿2刊後印	忠經集註詳解		宇都宮由的跋	東大總	龍頭
元祿3刊	科註妙法蓮華經	封面「冠註略解」		東大總	龍頭
元祿4刊	四書大全	心「龍頭」簽「龍頭口増」	熊谷立閑注	内閣	龍頭
元祿9印	内閣秘傳字府	簽「龍頭」「龍頭引用書」	寺井辰撰	東大總	龍頭
元祿10刊	古文眞寶前集	心「龍頭」簽「龍頭新增」	宇都宮由的跋	家藏	龍頭
元祿12刊後印	臨濟錄	「増補龍頭跋」	元祿12大智跋	東大總	龍頭
元祿16刊後印	董蒙須知		宇都宮由的跋	鍋島	龍頭
江戸初期刊	護法論	題簽「龍頭」		中川	龍頭
寶永2重刊	無門關	版心「首書」簽「龍頭」	寛文6刊後印	家藏	龍頭
寶永5印	虛堂和尚語錄		寛文9刊	普明寺	龍頭
正徳2刊	傳習錄	題簽「標註」	三輪希賢跋	中川	龍頭
享保2刊	新刻助語辭	封面「重訂冠註」	天和3本重訂	東大總	龍頭

表2-2

和刻本漢籍龍頭本年表

年代・刊印修	書名(略稱)	特殊稱呼	特記事項	收藏	形式
享保9印	禮記集説	題簽「首書」	寛文4刊	中川	龍頭
享保9印	春秋四傳	題簽「首書」	寛文4刊	中川	龍頭
享保9印後印	周易	題簽「首書」	寛文4刊	中川	龍頭
享保20印	玉篇大全		元祿4毛利琥珀凡例	多度津	龍頭
天明7印	字彙	題簽「頭書」	寛文12刊	内閣	龍頭
天明8印	孝經大義	題簽「首書」	明暦3刊	東大總	龍頭
寛政3跋再刊	詩經	題簽「新刻頭書」	鈴木温跋 享保9印	佐伯	龍頭
寛政3跋再刊	周易		鈴木温跋 享保9印	中川	龍頭
享和1年印	書經	題簽「新刻頭書」	寛文4刊	中川	龍頭
文政6印	四書	心「首書」簽「龍頭」	延寶2刊・天明3刊	二松圖	龍頭
文政8	忠經集註詳解	心「首書」簽「頭書」	元祿2刊?	佐師範	龍頭
天保6刊	祖英集	題簽・序「冠註」		東大總	龍頭
弘化3刊	孝經	封面「頭書」「龍頭」		東大總	龍頭
慶應1刊後印	詩經	題簽「再刻頭書」	寛文4刊寛政3重刊	佐伯	龍頭
明治9印	詩經	題簽「再刻頭書」	寛政3重刊	佐師範	龍頭
明治12刊	原人論發微録		天和2刊	中川	龍頭
明治14刊	龍頭韻府一隅	心「龍頭」簽「龍頭」		佐伯	三段
明治14刊	龍頭五經	心「龍頭音註」簽「龍頭音註」封「龍頭音註」		家藏	二段
明治15刊	龍頭箋注蒙求	封心簽序卷頭「龍頭」	鈴木義宗標注	内閣	二段
明治16銅刊	古文眞寶前後	封簽卷頭「龍頭」		内閣	二段
明治16銅刊	龍頭康熙字典	心「龍頭音註」簽「龍頭音註」		佐師範	二段
明治17銅刊	龍頭唐詩選	題簽「龍頭和解」	凶入り 和解	佐伯	三段
明治17刊	龍頭句解忠經	封簽卷頭「龍頭」		内閣	二段
明治17刊	龍頭句解孝經	封簽卷頭「龍頭」		内閣	二段
明治18刊	六祖法寶壇經		山田大應「冠註」	佐伯	龍頭
明治19刊	龍頭辨書四書	心「龍頭」封「龍頭」	上層のはみ出しあり	内閣	二段
明治23刊	龍頭十八史略	心「龍頭」簽「龍頭」		佐伯	三段
明治27重刊	龍頭音註四書	封「龍頭音註」簽「龍頭音註」		佐伯	二段
明治中	老子處齋口義	題簽「訂正龍頭」	延寶2刊・寶永6修		龍頭
明治中	周易	封面「頭書」	寛文4刊元治1重刊	家藏	龍頭
明治中	書經	題簽「再刻頭書」	寛文4刊享和1年印慶應2刊	多久	龍頭

凡例

- 1 本表は筆者が實見した、龍頭本形式の和刻本漢籍と、関連する文献の一覧である。
- 2 左から、實見書の刊年(刊は初刊本・重刊は再版等・印はその年の後刷り本・後印は年次不明の後刷り本)
- 3 書名(一部略稱)
- 4 特殊稱呼の事例と位置(心は版心・封は封面・簽は題簽・奥は奥付・卷頭は卷首題・序は序首題等)
- 5 特記事項(序跋訓點等の著者・元本の出版年・その他)
- 6 收藏主体(略稱 筆者の調査に係わってローカルな組織も多い)
- 7 形式(龍頭の語が左詰めなのは、龍頭形式による初版本。一字右は龍頭形式による初刊本にもとづく重刊本や後刷り本・補修本等。二段・三段は龍頭の稱呼をもちながら形式の異なるものの實態)
- 8 なお明治以降の出版物には、龍頭と銘打ちながら實態は二段・三段本であるものが激増する。その實例を筆者の實見書において掲げた。

表 3-1

論語集註 惺窩本・荔齋本引用諸說對照表

「學而」以下第一章第一節末

引用諸說	惺窩本	荔齋本
(學而)		
林希元存疑云 論語一書乃聖人設教之言	○	○
學的上云 高宗舊學于甘盤六經至此方言學字 (明丘濬)		○
通義程復心曰 六經中到商書說命篇方出學字… (程復心王逢)		○
正義曰 此篇論君子孝弟仁人忠信…		○
字彙曰 第次第…		○
(註 爲書之首篇)		
蒙引云 此爲書之首篇…亦是作字意但不謂作書 (蔡清)		○
(註 故所記多)		
禮記云 三王之祭川也…謂務本	○又有陳氏註	○同惺窩本
(註 乃入道之門)		
四書蒙引云 入道以知言積德以行言…	○	○
蔡先生云 學者先務此而後道可入德可積 (蔡清)		○
中州集 宋于文虛中…時習齋詩云… (元好問)	○	
許東陽曰 裳之要衣之領皆是總會處 (許謙)		○
吳氏程曰 謂指要綱領		○
(子曰學而時習)		
文林貫旨云 子是孔子門人尊稱之詞 (明李廷機)		○
疏正義曰 經傳凡敵者相謂皆言吾子…		○詳細
四書存疑曰 學兼知行時習是不已其功		○
四書副墨曰 不亦乎字含決意於疑詞… (陳組綬) * 1	○	
知新日錄云 不亦及乎字乃是自疑自信之詞… (鄭維岳) * 2	○	
蒙引曰 知者知其理未見於事…	○	
陳紫峰淺說 天命之性皆同…尽其性之域矣 (陳琛)		○
四書通義許白雲曰 人之受命於天…自然喜悅		○
白虎通 學者覺也…		○
許敬菴曰 放性而動謂之學 (許孚遠)		○
李卓吾曰 學從交覺亦從交… (李贄)		○
湛甘泉云 學覺也察知乎天理也		○
李南黎云 學字作體驗存說		○
袁了凡曰 …是學以復性 (袁黃)		○學以復性
經史質疑曰 學者何求仁也…進於安仁者也 (莊淦)		○
四書問答曰 近說學字指天理…無他學也 (郭偉)		○
直解云 學是做效…習是溫習 (張居正)		○
存疑云 學兼知行時習是不已其功也		○
湯睡庵四書脉云 時習是無須與間斷… (湯賓尹)		○
通義松塢先生曰 學習兼大學小學而言…		○
貫旨云 之字指學說		○
四書燃犀云 學惟不已此中純… (陳組綬)		○
又曰正在苦心時想見… (引葛寅亮「四書湖南講」)		○
四書說約云 刑疏言亦者凡外境適心… (顧夢麟)		○
李不朽曰 易云說言乎兌兌正秋也…		○
陳白玉四書副墨曰		* 1
鄭申補知新日錄云		* 2
蒙引云 學而時習一章…言其道之始		○
又曰 聖賢亦讀書…當先認箇學字		○
(註 學之爲言)		
章圖云 胡先生曰言學之爲字即是效… (程復心王逢)		○
中庸疏意云 釋經凡用爲言字		○
(註 人性皆善而)		
孟子曰 道性善言稱堯舜	○	○
(註 後覺者必效)		
孟子曰 伊尹曰天之生此民也…	○又有朱子註	○同惺窩本
蒙引云 人性皆善者理之一也覺有先後…	○	○
通義許白雲曰 此先覺字當專以古之聖賢…		○
金仁山曰 古人爲學是先從事上學… (金履祥)		○
蒙引云 必效先覺之所爲此所爲字兼知行		○
(註 明善)		

和刻漢籍龍頭本について

表 3-2

中庸二十章 不明乎善不誠乎身矣			○
蒙引云 先覺此已明善而復其初者吾必從…			○
(註 鳥數飛)			
禮記月令曰 季夏之月鷹乃學習		○又有鄭陳註	○同惺窩本
洪武正韻 月令鷹乃學習借爲學習字… (宋濂等)		○	○
(註 說喜意)			
通義云 說在心故云喜意			○
黃會稽四書發明云 喜意不是歡喜一樣…		○	○
存疑云 …蓋悅只是個歡喜故註曰喜意		○	○
蒙引云 說喜意也凡人之所以爲學而意思…			○
(所學者熟)			
程復心曰 學方是求所知所能理…說之至也			○
許白雲曰 學須隨事隨理求其知求其能… (許謙)			○
蒙引云 其進自不能已直到君子處方已			○
(註 程子曰習重習也)			
新安陳曰 朱子先以明道伊川爲別… (陳琛)			○
韻會 淡即協切說文洽也徹也…		○	
韻譜本義云 淡洽潤澤周徧也 (茅濤・范科)			○
易坎卦曰 習坎有孚維心亨行有尚		○又有程傳	○不及他卦
通義吳氏程曰 重習習即重也與習坎習吉義堂			○
(註 學者將以行)			
蒙引云 學者將以行之云々此悅字專以知…			○
(註 謝氏曰時習者)			
朱子上蔡語錄序云 先生學於程夫子昆弟之門…			○
曲禮曰 坐如尸立如齊註曰尸居神位…			○
通義許白雲曰 坐如尸坐時習立如齊立時習…			○
知新日錄曰 觀程謝之言則所謂時習者…		○	
謝氏曰 顏子問仁學也請事斯語習也 (謝良佐)		○	
惺窩本・荔齋本 一致件数 1 4			惺窩本の74%を荔齋本が採用
惺窩本 19件 荔齋本 64件			

引用諸説重複關係表

「周易」坎卦	1 ①	明鄭維岳「四書知新日錄」	2 ①
「禮記」學記	1 ①	明李廷機「四書文林貫旨」	2
「禮記」月令	1 ①	明陳琛「四書淺說」	1
「禮記」曲禮	1	明許孚遠「論語述」?	1
「中庸」	1	明湯賓尹「四書脉講意」	1
「孟子」滕文公	1 ①	明茅濤・范科「韻譜本義」	1
「孟子」萬章	1 ①	明顧夢麟「四書說約」	1
「白虎通」	1	明李贄「四書評」?	1
宋邢昺「論語正義」	2	明莊淦「經史質疑」	1
宋朱熹「上蔡語錄序」	1	明郭偉「四書問答」	1
宋謝良佐?	1	明張居正「四書直解」	1
宋金履祥「論語集註考証」?	1	明湛甘泉?	1
金元好問「中州集」	1	明袁黃?	1
元許謙「讀四書叢說」?	2		
元黃公紹編「古今韻會舉要」?	1	黃會稽?「發明」?	1 ①
元陳櫟「四書發明」?	1	吳氏程?	1
元程復心明王逢「四書通義大成」	9	李南黎?	1
明林希元「四書存疑」	3 ③	李不朽?	1
明丘濬「學的」	1		
明陳組綬「四書燃犀解」	2	「中庸疏意」?	1
明陳組綬「四書副墨」	1 ①		
明宋濂等奉勅撰「洪武正韻」	1 ①		
明梅膺祚「字彙」	1		
明蔡清「四書蒙引」	3 ② 9		

「3 ② 9」は、惺窩本に3例、荔齋本に11例あり、内2例は兩本に重複する。

人名の次に?の有る場合は、人物不明。

王朝明人名の次に?の有る場合は、著作書名等不明。

人名書名の次に?の有る場合は、その著作で妥當か不明。

書名の次に?の有る場合は、著作者不明。

古文真寶諸本題號不同
 ○魁本大字諸儒箋解古文真寶前集 ○善本大字諸儒箋解古文真寶後集 ○諸儒箋解古文真寶前集 ○善本明本之
 兩本所載之文畧于今之本
 魁本前漢書游俠傳云閻里
 之依原法爲魁師古曰魁者
 斗之所用盛而杓之本也故
 言根本者皆云魁 ○禮記檀
 弓上曰君從父昆弟之仇如
 之何曰不爲魁註魁猶首也
 天文北斗魁爲杓爲杓爲杓正
 義曰杓春秋運斗樞云北斗
 七星第一天樞第一旋第三
 機第四權第五衡第六開陽
 第七搖光第一至第四爲魁
 第五至第七爲杓是魁爲杓
 杓爲杓 ○後漢黨錮傳云爲
 之魁註魁大帥也諸儒指註
 者而言也休齋迂齋東萊魯
 山等也 ○禮記儒行篇註曰

魁本大字諸儒箋解古文真寶

勸學文

卷之一 前集

○真宗皇帝勸學 言人能勤學則
 田好宅僕從 富家不用買良田書中
 妻妾之奉也
 自有千鍾粟安居不用架高堂書
 中自有黃金屋 廣兩尺深一尺
 上屋 出門莫恨無人隨
 多如族聚莫恨無良媒

寬文五年武村三郎兵衛刊本
 魁本大字諸儒箋解古文真寶前集

論語集註大全卷之二
 學而第一
 此為書之首篇故所記多務本之意
 一箇根柢○胡氏曰此篇首取其切於學蓋記之故以為多務本之意○新安陳氏曰揭君子務本一句以為首篇之要領此說本於游氏朱子已入賢賢易色章下於此又首標之如首章以時習為本末章以孝弟為為仁之本三章忠信為傳習之本道下乘章以五皆為治國之本皆是餘可以類乃入道之門積德之基學者之先務也凡十章慶源輔氏曰道者人之所共由必有所從入德雖在我之所行得必積而後成凡此篇所論務

言蓋論語二十篇學而一篇則為之首也亦是作字意但不謂作書務本禮記學記云三王之祭川也皆先河而後海或源也或委也此之謂務本陳註河為海之源而後進放乎四海有本者如此君子之於學亦成算不達故先務本
 入道之門積云云蒙引云入道以知言積德以行言此事在事物為道得此道於心則為德日門曰基者本之所在也學者必先務此而後道可入德可積○又云大學之明德得於有生之初者也此之積德全於已生之後者也
 細註要領許東陽曰哀之要衣之領皆是總會處吳氏程曰謂指要領

元祿四年洛陽書肆刊本 四書大全